

## 北部人旅行者の見たアメリカ南部

— F・L・オムステッド『棉王国』覚書 —

中 村 紘 一

(1)

フレデリック・ロー・オムステッド Frederick Law Olmsted (1822-1903) によると、南北戦争が始まる少し前の一八五八年三月四日、サウス・カロライナ州の「ジェームズ・H・」ハモンド知事は上院での演説中次のように述べたという。

「その通りです！ 棉に対して戦争を挑むことはできないのであります。この世のいかなる強権もそれに戦争を挑むことはできないのであります。棉は王<sup>キング</sup>なのであります。最近まで、イングランド銀行が王<sup>キング</sup>でありましたが、一昨年<sup>1857年</sup>の秋、例によって棉作への締付けをしようとして、完全に負かされてしまいました。最後の強権が征服されたのだから、最近の出来事を見て来た者で誰が、棉の至上であることを疑うことができましょうか。」①

当時、南部のほとんどの要人たちは似たような発言をしており、オムステッドはこれに対して、「もし「彼らの」心の中にこの確固とした自信がなかったとしたら、南部はあの大きな恐しい誤ちを犯すことは決してなかっ

たであらう」と述べている。さらにこのことに関連して、オムステッドは次のように続けている。

わが国の奴隷州の人々の現状を私自身が観察してみても、私は、反対に、棉の独占が何らかの点で、いい結果よりも悪い結果を及ぼしたという印象を受けた。私の見聞録はこんなことを述べる意図ではなかったが、今回出版に際して読み直してみるとこの印象が一つの確信となつてゐるのを知つた。したがつて、私がここで行ないたいことは、本書における主要な観察が私の頭の中でこの疑問にどのように関連しているかを示し、また、その観察から導かれると思われる結論がこれらの州の国勢調査統計によつてどの程度裏付けられるかを調べることである。②

このような意図を持つて出版されたのが、『棉王国』*The Cotton Kingdom; A Traveller's Observations on Cotton and Slavery in the American Slave States* (1861)とらう二巻本であつた。オムステッドは、戦前の南部、つまり、いわゆる棉王国を自分の眼でつぶさに観察し記録した数少ない北部人の一人であつた。

(2)

オムステッドは、一八二二年、コネチカット州ハートフォードの裕福な商人の息子として生まれた。正規の学校教育とは余り縁がなく、十六歳になるまでに次から次へと家庭教師(主として田舎の牧師たち)の教育を受けたが、得るところは少なかったという。彼が学んだ多くは、公開講演、自発的な読書、ハイキング、旅行によるものであつた。加えて、十四歳の時、ウルシの毒で一時眼を悪くしたこともあつて、イェール大学には正規の入学を許可されず、科学の講義などを聴講するのみであつた。もっともこの間に、商船の船員として、広東を始め中国の幾つかの港へ航海していることは注目されてよい。

一八四七年二十五歳の時、父にニューヨーク市スタテン・アイランドに一三〇エーカーの土地を購入してもらい、彼は地方の名士および科学的農場主として身を立てることにした。熱心な農場主として、さまざまな改良・改革を試み、その成果を着々とあげて行った。一八五〇年には、農業に対する関心と生来の旅行好きから、弟のジョンと友人のチャールズ・ブレイスとともに、イングランド、ウェールズ、アイルランド、ドイツ、ベルギー、フランス、スコットランド地方の徒歩旅行を敢行し、ヨーロッパの農業を見て廻った。この時の経験を綴ったものが、『アメリカ農民のイングランド下見聞記』*Walks and Talks of an American Farmer in England* (1852)である。この書物の意図は、著者がこれら諸外国で得た農業に関する実際的な情報と実用的な提案をアメリカ農民に与えることであつたという。

(3)

このようにして、処女作を発表したオムステッドは、文筆家としての道を歩む希望をひそかに抱いていたようである。というのも、一八五二年、『ニューヨーク・タイムズ』紙の編集員から、南部取材旅行の話もちかけられると彼は二つ返事で承諾し、その年の十二月首都ワシントンを皮切りに南部大旅行に出発するからである。それは、鉄道、蒸汽船、駅馬車を利用して、ヴァージニア、南北カロライナ、ジョージア諸州の東側を通りサヴァンナまで南下し、そこから西へ向かつてジョージア州とアラバマ州を横断し、モントゴメリからは蒸汽船でモービル、ニューオーリンズまで下り、その後はミシシッピ川をヴィクスバーグ、メンフィスへと北上して、最後はアパラチア山脈を横断してヴァージニア州まで戻るといふ行程で、彼が故郷のスタテン・アイランドの農場に

帰ったのは翌一八五三年四月初めであった。

この旅行中、彼は特派員として『タイムズ』紙宛に八通の手紙を送り、それらは「南部」という題で同紙に連載されたが、その後、帰郷してからもさらに四十二の記事を書いた。これらの記事は南部北部両側において十分反響を呼んだらしく、その結果、『タイムズ』紙の編集員は、一八五三年十一月、オムステッドを再び南部に派遣することにした。今回の旅行の特徴は、いきなりケンタッキー州ルイヴィルに向かい、テネシー州ナッシュビルを経てミシシッピ川を下り、ニューオーリンズに至り、そこからは馬でテキサスまで脚を伸ばしていることである。この間九カ月、やはり『タイムズ』紙には、「南西部の旅」という題で十五の記事を、そして三年後には、「故郷の南部人」という題で『ニューヨーク・デイリ・トリビューン』紙へさらに十編の記事を寄せた。

この後直ちに、オムステッドはこれらの記事をもとにした本の執筆を思い立つが、ニューヨークの図書館でさまざまな資料収集を行ったりして、一八五六年一月やっと彼の三部作の第一作、『沿岸奴隷州の旅』*A Journey in the Seaboard Slave States, with Remarks on Their Economy* を出版する運びとなった。さらに一年後には、第二作の『テキサスの旅』*A Journey Through Texas or, a Saddle-Trip on the Southwestern Frontier* を、そして、一八六〇年には『奥地の旅』*A Journey in the Back Country* を出版して、ようやく三部作を完成させることができた。ところで、この一八六〇年十一月には、リンカーンが大統領に当選したため南部の連邦分離が行われたのであるが、それに際して、オムステッドのその三部作の英国における出版元は、英国の読者の南部理解のためにそれら一つにまとめた簡約版を作るよう彼に要請した。しかし、当時ニューヨーク市セントラル・パークの設計に忙しかった彼は、ワシントンの反奴隷制新聞『国民時代』ナショナル・タイムズ紙の編集員ダニエル・グッドローにこの仕事を依頼し、自分自身の仕事としては新しい序文「現在の危機」を書き添え、また一八六〇年の統計を補うにとどめた。こう

して、一八六一年出来上ったのが先の『棉王国』で、まず英国の出版元から、続いて本国で、発行されることとなった。

オムステッドが文筆家としての『棉王国』出版に至るまでの極めて簡単な経緯は以上の通りであるが、ところでその彼にとって『棉王国』の著者であることと勝るとも劣らないものに景観建築家としての仕事があったことはやはり言い添えておかねばなるまい。今触れたニューヨーク市のセントラル・パークのみならず、ブルックリンのプロスペクト・パーク、ボストン市やシカゴ市の公園、カリフォルニア大バークレー校やスタンフォード大のキャンパス設計など彼の手による現存の景観建築は驚くべきほどに多いのである。彼は実務家として十九世紀後半アメリカにおける名士の一人であった。

(4)

さて、上・下二巻本からなる『棉王国』は、一九五三年になってアーサー・M・シュレジンガーによりシュレジンガー自身の序文を添えて一冊本に編集されることになったが、それでもまだ六百頁以上の大部のものである。しかも、これは旅行記であるから、著者の訪問した土地の順に記述が行われていても、その観点は必ずしも首尾一貫し系統だったというものではない。土地に着いた時の印象、小耳に挟んだ会話、土地の新聞記事、レストランのメニュー、後に調査した統計表といったふうに、雑多なことがらが書きとめられている。読者には、南部についてのさまざまな情報を得られてもその印象が散漫になりがちであることは否めない。それでも、全篇を通しての記述をあえてまとめみると、南部奴隸(制)の現状と南部棉大農園(主)の実態の報告およびそれに対す

る著者の意見が本書の大きな要となつているといえよう。

そこで、まず前者についてであるが、オムステッドは、例えは、付録として、「ヴァージニア州における奴隷売買」という標題で、地方紙の新聞記事などをもとにした報告をする。それによれば、彼は、リッチモンドでは実際に奴隷の競売を見聞することになる。ここでは、奴隷は、一般の店においてと同じく、何はばかりことなしに商品として人々の眼にさらされている。彼は奴隷の価格表を手に入れ、それをまず転載する。

男子(優)、一八〜二五歳、	一、二〇〇〜一、三〇〇ドル
“(並)、”	九五〇〜一、〇五〇”
少年、	五フイート
”	八五〇”
”	九五〇”
”	四フイート八インチ
”	七〇〇”
”	八〇〇”
”	四フイート五インチ
”	五〇〇”
”	六〇〇”
”	四フイート
”	三七五”
若い女子	八〇〇〜一、〇〇〇”
少女	七五〇”
”	八五〇”
”	五フイート
”	七五〇”
”	八五〇”
”	四フイート九インチ
”	七〇〇”
”	七五〇”
”	四フイート
”	三五〇”
”	四五〇”

③

午前十時、いよいよ競売は始まる。最初は三人の子供を連れた女性である。四人合わせて八五〇ドルまでの値がつくが、結局安すぎて商談は成立しない。

……次の競売品は男であった。助手が手招きして、裏窓近くに立ててある二枚折りの布製の衝立の背後に行くように言った。男が大人しく立ち上つて、衝立の背後に行くとき衣服を脱ぐように命令された。彼は抗議の言葉も目つきも与えず言われるがま

までであった。この哀れな男が衣服を脱ぎ始めると十人余りの紳士がその場に押し寄せ、さらに男が頭のとっぺんから瓜先まで真裸になって床の上に立つと、非常に厳しい検査が行なわれた。真黒な肌が、前と後の両方、病気の痕がないかどうか全身にわたって詳しく調べられた。彼の身体で検査を受けない部分はどこもなかった。両手を開閉するように命じられ、棉が摘めるかどうか尋ねられ、口の中の歯の一本一本が細かく検査された。検査が済むと、服を着るよう命じられ、着終ると、台の方に歩いて行くようにと告げられた。④

この後にも、さらに若い女性、男、七歳の少年の競売の様子がありのままに詳しく描かれる。最後にオムステッドは「すべては、情感も、偏見もまじえずに、起った通りのことが記述されている。これほど人の感情に強く訴える主題について感傷的になることは難くないことであったが、私はただ純然たる真実を語りたかったのである」⑤と述べている。つまり、著者の眼は冷酷なほどに写実的なのである。

(5)

ところで、この明らかに非人道的なものとしての奴隷(制)が、なぜ南部には存在しうるのか。

オムステッドは、同じように南部旅行者であったが、奴隷制弁護論者である、『ロンドン・タイムズ』紙のロバート・ラッセルの意見に言及する。

ラッセル氏は、南部の惨状をはっきりと見ていながら、奴隷制は結局のところ、大量の安価な棉を世話をするための必要悪であるという棉大農園経営者の意見をそっくり受け入れている。⑥

すなわち、ラッセルの考え方は、棉農園主の「奴隷労働力がなければ、合衆国における棉生産はかなり微々た

るものになる」という言い分や、英国や合衆国北部の工場主に圧力をかけている、「奴隷制の永続化は多量の棉供給のために必要であり」、それがなければ急激な「価格上昇」をきたすという理由を鵜呑みにしているというわけである。

さらに、ラッセルの意見から推論できる「棉文化における奴隷労働の有利な点は、最良の棉地帯、特に川岸の堆積層地帯が、自由白人労働者には健康的に良くないという理由によって主として断言できるからに思われる」⑦というのである。つまり、この地帯の暑さ、湿度等は白人労働者に向いていなく、黒人奴隷の労働力によってのみ、棉生産は可能であるという。しかし、これに対しては、オムステッドは、「南部の黒人が白人に較べて地方病にかかりにくいという一般の意見には疑うべき根拠がある」⑧と反論し、チャールストン市の死亡率統計を例にあげて、「〔南部の〕気候は黒人にとってははるかに不向きであることを示している」⑨と結論する。

ところで、オムステッドは、もちろん奴隷制が非人道的であることを十分承知していたが、だからと言って、自らを「奴隷制廃止論者」であると宣言することはなかった。というのも、北部人である彼がそう宣言して、過激派になることも、また（南部から見れば）偏見の持主であるというレッテルを貼られることも好まなかったようである。彼の用いた戦略はどうかすると感傷的になり勝ちな人道主義ではなくあくまで科学的・経済的根拠に基いて黒人奴隷制の必要性を訴えようとするものであった。そこで、彼はまず、「合衆国の棉生産には、強制労働者の大群が不可欠、ないしは重要というラッセル氏の仮説の誤ちは、私が思うに、明らかである」⑩と断言し、「そして、棉耕作に必要な労働は、棉生育地の気候が白人には過酷であるという……一般大衆の意見に関して、私はそれを支持するわずかの事実も見出すことができないことを繰り返して言いたい」⑪として、ニュージーランドにおける七月の刈入時の（白人による）労働の方がはるかにきついことを例としてあげる。



次に、彼が述べているのは、たった今テキサス州サン・アントニオからの手紙を受け取ったばかりだが、それによれば、「テキサス州西部の一握りのドイツ人たちは今季、自分たち自身の〔黒人奴隷を使わない〕労働の産物として、一〇、〇〇〇梱の棉を出荷できるだろうと見積っている」とのことである。だとすると、「もし万一これが実際には半分になったとしても、ラッセル氏に従ってテキサス西部を真の棉地帯の外側にあると見なし、さらに、一般の棉栽培者の主張の真実を当然のことと認め肉体的強制のもとに働くアフリカ人〔黒人〕が合衆国の将来に予想される需要に見合う唯一の手段であると考えて来た人々にとってさえ、これが年間に必要とされる供給に十分貢献しうるに違いないと考えるであろう」<sup>⑩</sup>とオムステッドは白人による棉栽培の可能性を訴える。

(6)

オムステッドは次に、一般に奴隷労働と自由労働の性質の違いを検討し、前者がいかに非能率的で不経済であるかを例証しようとする。これは新聞記事からの引用を、付録の形として書き添えているものである。

〔自由労働者の〕頭はその肉体と同様労働し、この頭脳労働は大いなる量の肉体労働を節約する。そのうえ、自由労働者は最も大きな動機に駆り立てられている。彼は自らの労働の産物を享受する。彼の労働が頭を使い、熱心になればなるほど、彼の受ける報酬はより豊かになる。奴隷労働はこれとまさに対照的である。それは、思考のない——計画のない——動機のない労働で、頭を使わない労働である。それは盲目的強制力にとんと等しい。目撃したことのない人には、一人の奴隷が、あるいはその集団が、決められた時間内に成就する仕事の量の少なさを全く想像できないであろう。彼らの不器用なこと、遅鈍なこと、眼前の仕事を成就するにあたり、全く技能と工夫を欠いていることは、精気と活力を持って仕事がなされるのを見て来たものにとっては誠に苦痛である。しばしば彼らは、少し考えればほんのわずかな時間で片づけられるか、あるいは、多分全く避けられることを何時間も費して行なっているのである。<sup>⑪</sup>

(7)

このような非能率的な労働からなる奴隸制は南部経済にどのような影響を与えているのか。旅行者のオムステッドの観察は続く。

ミシシッピ川岸からジェイムズ川岸まで、多分二、三の町を除いて、一本の温度計も、一冊のシェイクスピアの本も、一台のピアノも、一枚の楽譜も、カルセル燈も、セクターテープルも、電気スタンドも、たといわずかな価値でもある芸術作品の彫刻も複製も見られなかった（と私は憶えている）。私は一般に「貧乏白人」と呼ばれている人々について述べているのではない。これらの家の大多数は株主の屋敷であり、かなりの割合で棉農園主なのである。<sup>⑭</sup>

つまり、南部の農園主の生活ぶりは、想像に反して貧しいというのである。オムステッドは「現状のアメリカの奴隸制は、棉独占が提供すると考えられる富の莫大な利点にもかかわらず、一般の人々が『快適な家庭』を営むのを阻害している」<sup>⑮</sup>と述べる。「九割の市民にとって、快適な家庭など、現状の制度下では問題外である」<sup>⑯</sup>ともいうのである。その理由は、資本の多寡、所有する奴隸の数、土地の肥沃状態の条件によって、少数巨大農園主の棉生産の寡占化が進むためであると、オムステッドは考察する。資本のある農園主は所有する奴隸の数を増し、肥沃な土地に棉農園を持ち、それだけ生産をあげてますます富むが、その数はますます少なくなるといって構造が存在するというわけである。「南部には農園主のみならず、不動産業者、奴隸売買人、一般商人といった非常に多くの極めて豊かな人々がいるが、しかし、それはほとんど、自由労働者の居住地、自由国と絶えず直接的な間柄と親密な関係を有する都市、あるいはその近郊においてであり、それ以外では、これら裕福な人々の富

は、自由州ではどこへ行ってもささやかな富であるようなわずかな利点を彼らに保障しているにすぎない。しかも、その数は極端に貧しい人々の数と比較すると余りにも小さく、住民の条件を評価するにあたって全く物の数とならないに違いないのである。ところが、この貧しい人々の犠牲において、さらにまた、彼らが所有する奴隷の犠牲において、富裕階級の富は蓄積されてきたのである。」①奴隷制は、南部全体を見る限り、結果的にはその住民の生活水準を低化させているというのがオムステッドの結論である。

(8)

しかも、これは、奴隷制が経済的な側面のみにおいてもたらす弊害にすぎない。奴隷制が道徳的・社会的にみて南部人の一般的な性格にどのような影響を与えているかということが次に問題になるが、これについてもオムステッドは秀逸なエッセイを書いている。彼はまず「奴隷制は奴隷の所有者の性格に、静かではあるが大きな影響を及ぼし、奴隷の条件はこのような影響を受けた性格によって大きく左右される」②とし、具体的に次のように考察する。

思うに、奴隷制の直接的な影響は南部人を小さな事柄に無関心させていることである。ある関係では、小さな事柄に対して「高慢」<sup>レナリヤ</sup>な、すなわち、おおまかで、出たとこ勝負で、これ見よがしに寛大である。その日常的で、制御のきかない威信のせいで（私の判断するところでは、南部人は子供の頃から、すべての点で、世界中のどの国民に較べても制御するということを知らない）、彼は衝動的で、性急で、熱狂的であることが習慣になっており、自尊心と威厳のある性格を作りあげ、大胆で、自信を持ち、性格に嘘がない。しかし、思うに、現在、一般に信じられているほどには南部人が率直であつて来たようではない。彼は自分に非常に関係がある話題に関しては、極めて秘密にするか、少なくとも口をつぐんでいるように見える。彼は自

分の分を心得ていて他人の事に干渉しないが、それは英国人的な流儀ではなく、自分特有のもので、おそろく、一つには好奇心の欠如の、一つには目下の者（黒人）と極めて恒常的に接触することで形成された習慣の、さらに一つには「名譽を重んじる作法」がゆえに会話において配慮される用心深さの、せいである。英国人的な流儀ではない、と私は述べたが、その理由は彼は見知らぬ人に対しては、ものおじしたり自分がどんなふうに映っているかを考えたりしないで気楽に会い、会話では手慣れて堂々たる態度を見せるからである。彼は漠然と、無頓着に、一般的な事柄を述べる傾向にあって、正確で注意深い話の筋を辿ることを全く拒否する。自分の自然な衝動に堂々と従い、恥じたりするものは何もないから、いつも本当のことを言っているのであるが、しかし、あらゆることに不注意で衝動的で漠然としていて正確さを欠くために彼の口から出る言葉は、實際のところは、他の誰のものよりも嘘であることが多い。⑩

一般に「南部人の接待」と呼ばれている南部人特有の風習についてのオムステッドの考察はこうである。

黒人との幼い頃からの親密な接触ゆえに（悪影響という点で実りある交流である）、彼は容易で、さりげない、そして表面的な善意、善性、親切心を大いに身につけた。大農園生活の比較的孤獨な性質と幾分単純な仕事のゆえに來客をいつも極めて接待することになり、一方では自由に使用できる召使いが沢山いたりその他の状況のせいでも通常の接待の務が大変軽いものとなる。しかしながら、南部人は心からの接待には大いに欠けており、自分とは無縁のものとして育てられたすべての意見や目論見に対しては、時には紳士としての自らの性格とは相容れないように思える軽蔑心や偏狭心で自らの門戸を閉ざす。彼の心は大きいが開かれることがない。⑪

次に、労働・仕事に対する姿勢にも北部人と南部人の間ではその相異が見うけられるか。オムステッドによれば、南部人が「生活そのものをエンジョイし、存在することに満足している」のに対し、「北部人は進歩それ自体を楽しむ」という。

南部人は目的のみに注意を払い、手段については性急である。彼は情熱的で、働くのも情熱的、発作的、堅固な意志よりも

怒りのエネルギーと力をもって働く。自分の目的を達成するために働くというよりもむしろ戦っていると言える。アメリカ人一般に見られる強烈な性格を持っていて、ゆえに興奮を楽しみ新奇を好むが、北部人に較べてはるかに好奇心は少なく、独創の才、発明の能力、辛抱強い不撓不屈のエネルギーという点においても劣っている。そして、私が思うに、これらすべては細かな観察に適応能力がないこと、小さな事柄に専念するのを嫌うことから来ている。これは、思うに、自分の快楽に対して刺激的で大きな重要性や直接的な関わりを持たないようなすべての事がらを自分の奴隷に任せ、自分の怠惰のせいで、彼らがそれをできる限り軽んじ無視するがままにしているのを見慣れて来た結果であると主として推論できる。②

さらに、南部のいわゆる「上流階級紳士」とその紳士が尊ぶ「名譽」に関して、オムステッドは次のように言及している。

南部の（南部言葉で言うところの）「上流階級紳士」は北部では滅多に見られない。これは、北部の最も教養ある人々とは違って、都市工場の製品ではない。彼は特有の性格と習慣を具えていて、それは英国人においてならおそらくどの階級よりも「由緒ある英国紳士」のそれに似ている。乗馬を大いに楽しみ、狩猟や屋外スポーツに精を出し、また酸素不足になることも決してない。というのも、冬でも、窓やドアはいつも閉め忘れられているからである。従って、彼は、その食事が嫌悪すべきものであっても、一般的に見て、肉体的にはよく発達しており、——英国郷土よりも軽く繊細であるけれども、背が高く筋肉質なのである。彼の顔は大体ハンサムであるが、口は過度にたばこを嗜む習慣のせいで鈍感で、生気がなく、無表情になっている。彼は特有のプライドと空想癖を持っていて、しばしば笑止千万にもドン・キホーテのように見えることがあるにもかかわらず、言葉の最善の意味において、騎士的である。彼は勇敢で、かつ寛大で親切で礼儀正しいがそれはすべての白人に対してだけである。しばしば自分の快楽や目論見の成功、情熱の満足を、キリスト教倫理の既製規準の遵守よりも尊ぶことがあるとしても、名譽ほどに生命を、あるいはその他のことを尊ぶことはない。この「名譽」とは、分析するならば、感情と行動のための慣習的な規準にすぎないが、必ずや人に自らを紳士と考えさせる資格を与えているに違いない。それは、——北部において、——少なくともこの世では、宗教として、しばしば通っているものよりも実際はるかに高貴であるようなことが常で、また、人間の方が高貴であるようなことにもさせてしまっている。③

しかし、オムステッドによれば、南部紳士にも二種類があって、それは「尊敬すべき真の紳士」と「その生活

が快樂と病的な興奮に夢中になっているような紳士」で、その数の割合は一对二であるという。後者について、オムステッドは述べる。

彼らはどこへ行つても目について、立派な身なりをし、惜しげもなく金を使い、酒、たばこ、嗜みたばこを常習し、カードと賭けごとに余念がない。市街戦とか、議事妨害とか、連邦脱退、ないしは戦争計画とかといったひどく感覺的、ないしは刺戟的なこと以外の話題については話し合うことができない。こういった人たちは、しかしながら、上流社会（上流社会の形式と慣習に通曉しているという意味で、また、婦人に対して恭しいという意味で、さらに、（金のこと以外では）彼らの言葉は暗黙のうちに信用できるという意味で紳士である。彼らは北部において同じような習慣をもったどの階級よりもはるかにその数は多い。②）

彼らは南部においては多数派であるから、彼らに関するオムステッドの説明は詳しくならざるをえない。

彼らはきままつて政治的であり、一般にすべての政治的な党大会や幹部会を支配する。彼らは生命を意に介さないという意味で勇敢であり、生命の危険を冒すような刺激を極端に好む。自分自身の生命同様他人の生命にも無頓着である。彼らは軍人としての名声に特に野心的で、メキシコ戦争ではほとんど一人残らず志願し、その多くは何人かの黒人召使いを連れて一兵卒として参加した。自分たちの怠惰の手段としての棉傭に依存できない時には、絶えず国家を戦争に仕向ける。しかし、そうでありながら、彼らは強国に対して提案する政策では英国の棉花王やオーストリアの地主同様保守的である。彼らはフランシス・ヨーゼフ（訳注、神聖ローマ帝国皇帝一七六九—一九〇）で、啓蒙専制君主の典型ヨーゼフ二世のことか？と同じくヨーロッパの民主主義者を憎み輕蔑する。ナポレオンを称え、べてん師（訳注、ロジヨシュ・コシュート、一八〇二—一九四、ハンガリーの愛国者、政治家、急進的民主主義の闘士）を侮蔑を持つて遇することができたのを誇りにしている。②

オムステッドは、こうして南部人を詳しく検討した後、最後には、彼らを断罪する。

彼らは自分たちのことを民主主義者、時には、民主的ホイッグ党員と呼ぶ。彼らのことをどう呼ぼうと、彼らは有害な階級、——現在では、合衆国の危険な階級である。彼らは、有難いことには、民主主義の嫡出子ではなく、ある種の民主主義のもと

における、奴隷制の嫡出子なのである。⑧

(9)

ところで、南部人に対するオムステッドのこのような断罪を讀むと、彼がもはや南部旅行の単なるルポルタージュに終始しているのではなく、ある思想を持って南部世界に対する価値判断を行なっていることがわれわれには判ってくるのではないか。この点に関しては、一九五三年出版のアーサー・M・シュレジンガーが自ら編集した『棉王国』の中で付けた序文と、一九八四年の同じ版に基きながらランダム・ハウス社から出版され、その際新しくチュレレン大学教授ローレンス・N・パウエルが付けた序文とを比較してみると興味深い。シュレジンガーは、「オムステッドが、その最適の有資格者の判断において、旧南部の状況に対する公平無私で信頼できる証人であることは明らかである。当時、他の観察者で同等の信任状を得られるものはなかった」⑨として、オムステッドには偏見の問題はなかったとしている。しかし、パウエルは、「彼〔オムステッド〕は単に中立で公平無私の観察者ではなかった」⑩と思わせるものがあるとし、オムステッドは「かなり典型的なニューイングランドの自由土地論者」⑪で、経済的自由主義者の理想的労働制度やニューイングランドの理想的生活様式にとらわれていたと考える。パウエルは、さらに、「しかも、歴史家たちはオムステッドの重要な結論のいくつかに誤ちを見出した」⑫と指摘し、それによれば、「オムステッドは自由労働が常に奴隷労働よりも安くつくことを確信する余り、奴隷制の有益性を南部経済のほとんどあらゆる段階で過少評価した」⑬というのである。具体的には、オムステッドは奴隷所有者が奴隷制を通して高水準の生活をすることはできなかったと言っているのは誤りで、「平均的

奴隷所有者は平均的北部人よりも五倍以上もの裕福な生活をしており、国中で最も富裕な人々の中に位置していた<sup>⑧</sup>と述べる。それに、パウエルが指摘しているもう一つ注意すべき点は、「国全体が、分裂と内乱の方向に流れて行くにつれて、オムステッドもそれに歩調を合わせ、その間に彼の文章の調子もいっそう論争的<sup>ゴレミカ</sup>になって行ったことである。新聞に記事として書いた時の寛大な心は南部三部作として書物になった時には全然見られなくなった。三部作の一作目：が出版された一八五六年には、奴隷州にも埋合せをすべき長所があるなどと認めることにははや全く興味をなくしていた。彼は今や奴隷州に見られる残酷なことがらは単に派生的なものなどでなく制度に不可欠なものであると確信した。南部人の欲得<sup>サザン・ホスピタリティ</sup>は欲得<sup>サザン・ホスピタリティ</sup>でけち臭いものであることを知った。彼は南部人の上品さの神話を擲擲した：」<sup>⑨</sup>というのである。

したがって、パウエルのオムステッドに対する評価は結論的には次のようになる。

『棉王国』は、…オムステッドの生涯の早い時期から一つの遺産となつてゐるが、それは彼や北部の他のインテリや改革者たちが、奴隷社会からの挑戦に対抗するために、自由社会についての自分たちのヴィジョンを明確にしなければならぬと感じたためであった。もし読者はオムステッドの実地の観察に伴う鋭い知覚と恒久的な有用性だけでなく彼の社会的経済的議論の思想的起源をも心に留めておくならば、この作品は大いに役立つ読物となりうる。議論と観察の両者が相俟つてこの作品をアメリカの社会批評の古典としてゐるのである。<sup>⑩</sup>

『棉王国』に対するこのパウエルの論評にさらに付け加えねばならないことは、おそらく何も無い。オムステッドはやはり、あくまで北部人として棉王国南部を観ていたのである。しかし、彼の眼と耳は鋭く（とりわけ彼の耳は敏感で、それは本書において南部人の訛をよく写していること、さらに、彼が旅行中その喋り方で常に南部人と思われていたことで判る）、その頭は冷静かつ知的であろうと努めているがゆえに、『棉王国』は南北戦争



時代の文化研究には、そしておそらく、今世紀の南部文学を読む上でも、無視することのできない作品であると  
言えよう。

## 註

- ① Frederick Law Olmsted, *The Cotton Kingdom: A Traveller's Observations on Cotton and Slavery in the American Slave States*,  
(ed.) Arthur M. Schlesinger, Sr. (New York: Alfred A. Knopf, 1953), p. 7.
- ② *Ibid.*, p. 8.
- ③ *Ibid.*, p. 595.
- ④ *Ibid.*, p. 598.
- ⑤ *Ibid.*, p. 600.
- ⑥ *Ibid.*, p. 494.
- ⑦ *Ibid.*, p. 497.
- ⑧ *Ibid.*, p. 499.
- ⑨ *Ibid.*, p. 500.
- ⑩⑪⑫ *Ibid.*, pp. 504-5.
- ⑬ *Ibid.*, p. 603.
- ⑭ *Ibid.*, p. 520.
- ⑮⑯ *Ibid.*, p. 522.
- ⑰ *Ibid.*, pp. 536-7.
- ⑱ *Ibid.*, p. 614.
- ⑲ *Ibid.*, pp. 615-6.
- ⑳ *Ibid.*, p. 616.
- ㉑ *Ibid.*, pp. 616-7.
- ㉒ *Ibid.*, pp. 618-9.

㊦㊦㊦ *Ibid.*, pp. 621-2.

㊦ *Ibid.*, p. xlvi.

㊦㊦ Frederick Law Olmsted, *The Cotton Kingdom*, (ed.) Arther M. Schlesinger, Sr., (intr.) Lawrence N. Powell (New York: Random House, Modern Library College Editions, 1984), p. xix.

㊦㊦㊦ *Ibid.*, xxiv.

㊦ *Ibid.*, xxix.

㊦ *Ibid.*, xxxiii.